

The Association of College and Research Libraries
A Division of the American Library Association

Information Literacy Competency Standards for Higher Education

「高等教育のための情報リテラシー能力基準」

2000年1月18日 ACRL/ALA 理事会承認

日本語訳：青山学院大学（東京）野末俊比古

改訳：関西学院大学図書館（兵庫県西宮市）魚住英子、国際

大学松下図書・情報センター（新潟県南魚沼市）小島勢子

情報リテラシーの定義

情報リテラシーとは、「情報が必要なときに、それを認識し、必要な情報を効果的に見つけ出し、評価し、利用する」ことができるように、個々人が身に付けるべき一連の能力である[1]。また、テクノロジーが急速に変化し、情報資源が増加している今日の環境において、情報リテラシーの重要性は一段と高まっている。この環境の複雑さはますます進んでおり、個々人は、大量で多様な情報の選択に直面している。—それは、大学での勉学においても、職場においても、私生活においても生じている。情報は、図書館、コミュニティ資源、専門団体、メディア、インターネットを通して利用可能である—そして、ますます、情報はフィルタを通さない状態、すなわち出典や妥当性、信頼性において疑わしい状態で、個々人に届けられるようになっていく。さらに、情報は、画像・音声・文字を含む複合的なメディアを通して利用可能であり、そのことは、個人が情報を評価し、理解するにあたって新たな問題を引き起こしている。不確かな質で、量も増えつづける情報が、社会にとって大きな問題をもたらしている。極めて多くの情報を持っていたとしても、それを効果的に利用するための能力がなければ、情報に通じた市民ということにはならない。

情報リテラシーは、生涯学習の基礎をかたちづくるものである。それは、すべての学問領域、すべての学習環境、すべてのレベルの教育に共通である。情報リテラシーによって、学習者は、学習内容を習得し、調査を展開でき、さらに自立的になれ、自らの学習をしっかりと管理できるようになる。情報リテラシーを身につけた個人は、次のことができる：

- ・ 必要な情報の範囲を確定する
- ・ 必要な情報に効果的かつ効率的にアクセスする
- ・ 情報と情報源を批判的に評価する
- ・ 選び出した情報を個人の知識基盤のなかに組み入れる
- ・ 特定の目的を達成するために情報を効果的に利用する
- ・ 情報利用をめぐる経済的、法的、社会的問題を理解し、倫理的、合法的に情報にアクセスし、利用する

情報リテラシーと情報テクノロジー

情報リテラシーは、情報テクノロジーを使いこなす技能と関連しているが、それよりもさら

に広く、個人、教育システム、社会に関連したものである。個人は、情報テクノロジーを使いこなす技能を身につけることによって、広範囲な学問的、職業的、個人的な目標を達成するために、コンピュータ、ソフトウェア・アプリケーション、データベース、その他のテクノロジーを利用することができるようになる。情報リテラシーを身につけた個人は、必然的に、ある程度のテクノロジーを使いこなす技能を習得することになる。

情報リテラシーは、情報テクノロジーを使いこなす技能とかなり重なるところが多いが、それとは区別される、より広範囲な領域に及ぶ能力である。情報テクノロジーを使いこなす技能は、ますます情報リテラシーに組み込まれて、また情報リテラシーを支えるものとなっている。全米学術審議会から出された 1999 年の報告書では、情報テクノロジーについて「自由自在に使いこなす」という概念が提唱され、情報リテラシーやコンピュータ・リテラシー、さらにはテクノロジーに関わる幅広い能力について、それぞれの相関関係を理解するために役立つ説明がされている。報告書によれば、「コンピュータ・リテラシー」は、特定のハードウェアやソフトウェア・アプリケーションの機械的学習に関係したものであるが、一方で「テクノロジーを自由自在に使いこなすこと」は、テクノロジーの根本的な概念を理解すること、および問題解決や批判的思考をテクノロジーの利用に適用することに焦点を当てたものである。報告書ではまた、初等中等教育・高等教育において理解できるように、情報テクノロジーを自由自在に使いこなすことと情報リテラシーとの相違を論じている。そのなかで、情報リテラシーの焦点は、内容、コミュニケーション、分析、情報探索、評価にあるのに対し、情報テクノロジーを「自由自在に使いこなす」ことは、テクノロジーの深い理解と、段階的に習熟して利用することに焦点があるとしている[2]。

情報テクノロジーを「自由自在に使いこなす」ことは、「コンピュータ・リテラシー」に伴うソフトウェアやハードウェアの機械的学習よりも知的な能力を要求するものである。しかし、その焦点は、なおテクノロジーそれ自身にある。他方、情報リテラシーは、情報を理解し、発見し、評価し、利用するための知的な枠組みである—それは、ある部分では情報テクノロジーを自由自在に使いこなすことによって、またある部分ではしっかりした調査方法によって達成される活動であるが、最も重要なことは、批判的かつ論理的に考えることである。情報リテラシーは、テクノロジーを用いることもあるが、最終的にはそれに依存しない能力を通して、生涯学習を開始し、継続し、発展させる。

情報リテラシーと高等教育

生涯にわたる学習者を育成することは、高等教育機関に課せられた使命の中核である。個々人が物事を推察し、批判的に考えられる知的な能力を身に付けることを保証することによって、また、学習方法を体得できるよう手助けをすることによって、大学は、情報に通じた市民やコミュニティの構成員としての役割の基礎と同様に、生涯を通じての継続的な成長の基礎を提供する。情報リテラシーは、生涯学習のキーとなる構成要素であり、また生涯学習に貢献するものである。情報リテラシー能力によって、フォーマルな教室環境を越えて学習を広げ、インターンシップや最初に就いた専門的な職業、さらには人生のあらゆる段階において、責任が重くなる仕事へと移っていくときに、実際の業務で自立的な調査を行うことができる。情報を評価、管理、利用する学生の能力を高めるため、現在、いくつかの地域や学問分野の認可団体は情報リテラシーを大学生にとってのキーとなる成果だと考えている[3]。

キャンパスに通学していない学生にとって、情報資源はしばしば、ネットワークや他のチャネルを通して利用可能なものであり、分散的な学習テクノロジーによって、教員と学生が同時に同じ場所にいなくても教授・学習が可能である。そうした、遠隔教育コースにおける情報リテラシーの促進にあたっての問題は、情報資源の学習に関して、従来のキャンパスにおいて提供されているものと匹敵するような範囲の経験をつくり出すことである。遠隔学習を行う学生の情報リテラシー能力は、「オンキャンパス（通学）」の学生のそれに相当するものであるべきである。

すべてのプログラムとサービスにおいて、また大学の経営体の隅々まで、カリキュラムを横断する情報リテラシーを組み入れるためには、教員、図書館員、経営管理者の協働的な努力が必要である。講義を通して、またディスカッションをリードすることによって、教員は学習手段を確立する。教員はまた、学生に未知の学問分野を探求するよう啓発し、どのようにすれば情報ニーズを満足させられるかのガイダンスを提供し、学生の進捗状況をチェックする。大学図書館員は、プログラムとサービスに関する知的資源の評価と選択を調整し、所蔵資料と情報へのアクセスポイントを組織化し、維持し、情報を探している学生と教員に対する指導を行う。経営管理者は、教員や図書館員のほか、情報リテラシープログラムを提供する専門職に対して、協働と研修の機会を設定し、プログラムの計画立案と財源確保において主導権を発揮し、それらを維持するための継続的な資源を提供する。

情報リテラシーと教育学

ボイヤー委員会報告「学部教育の再創造 (*Reinventing Undergraduate Education*)」で推奨されている戦略は、「重要な課題の設定、解答を見出すための研究や創造的な探索、結果を伝達するためのコミュニケーション・スキル」に学生が積極的に取り組む必要があるものである[4]。そのような方法で構成されたコースは、調査が必須であり、問題解決が焦点となり、批判的思考がプロセスの重要部分となるような、学生中心の学習環境を創り出す。そのような学習環境は、情報リテラシー能力を必要とするものである。

情報リテラシーの技能を獲得することによって、学生の自立的な学習の機会は倍増する。その際、学生は知識を拡張し、根拠が明確な質問をし、さらなる自発的な学習に向けて批判的思考力を研ぎ澄ますために幅広い情報源を利用できるようになる。情報リテラシー能力を獲得するためには、一連の能力がカリキュラムに無関係ではなく、カリキュラムの内容、構成、順序のなかに織り込まれていることを理解する必要がある。また、このカリキュラム統合によって、問題に基づく学習、根拠に基づく学習、調査に基づく学習といった、学生中心の学習方法の影響とインパクトを拡大する多くの可能性が生まれる。教員が問題に基づいたアプローチを指導することによって、学生は、講義や教科書だけをもっぱら利用するよりも深いレベルで、コース内容について筋道立て考えるようになる。問題に基づく学習の利点を最大限に活かすため、学生は、多くの場所にある様々な形式の情報源に習熟した利用者となるために必須の思考技能を用いる必要があり、それによって、自らの学習に対する責任も増加する。

調査において探している情報を入手するために、個人には多くの選択肢がある。一つは、図書館でみられるような情報検索システム、あるいはどこからでもコンピュータでアクセス可能なデータベースの情報検索システムを利用することである。もう一つの選択肢は、現象を直接、観察するのに適した調査方法を選択することである。例えば、医者、考古学者、天文学者は、

特定の現象の存在を発見するための実験に頻繁に依存することになる。さらに、数学者、化学者、物理学者は、現象間の相互作用を観察し、分析する際に、人工的な状態をつくり出すための統計ソフトウェアやシミュレータのようなテクノロジーをしばしば利用する。学生は、学部課程、さらには大学院課程へと進むにつれて、多様な情報源や学問領域に固有の研究方法によって収集された情報を探索し、評価し、管理するための機会を繰り返し持つことが必要となる。

基準の利用

「高等教育のための情報リテラシー能力基準」は、情報リテラシーを身につけた個人を評価するための枠組みを提供するものである。また、「基準」は、米国学校図書館員協会情報リテラシー基準タスクフォースの成果を拡張したものであり、それゆえ、本基準は、すべてのレベルの学生に期待される一連の事柄が身につくように、高等教育の情報リテラシー能力と初等中等教育のそれとを連結できるよう提供されている。基準で提示されている能力は、教員、図書館員、その他の職員が、情報リテラシーを身につけた者として学生を同定する具体的な指標を正確に定めるプロセスを略述したものである。

また、学生は、これらの能力によって、自らの環境において情報を取り扱う方法をコントロールするための枠組みを得ることができるので、それらの能力が有用であることを実感するだろう。そのことが助けとなり、学生は、学習に対するメタ認知的なアプローチを獲得する必要性を感じるとようになり、情報を収集、分析、利用するのに必要な行動を明確に意識するようになるだろう。すべての学生は、この文書に記述されているすべての能力を実際に示すことを期待されるが、全員が同じ習熟度や同じ速度で示すわけではない。

さらに、いくつかの学問領域においては、プロセスにおける特定時点の能力の習得に重きが置かれることがある。それゆえ、測定の際には、いかなる部分における他の能力よりも、ある特定の能力が大きな比重を占めることになる。能力の多くは、繰り返し実行されることになる。したがって、各基準に含まれる考察面や評価面においては、学生は、プロセスのより早い時点へ戻ったり、情報探索アプローチを修正したり、同じ段階を繰り返したりする必要が生じる。

基準を完全に実行に移すために、大学は、情報リテラシーがどのように学習を促進させ、大学の有効性を高めるのかを見定めるために、まず最初に大学の使命と教育目標を再吟味すべきである。情報リテラシー概念への理解を容易にするためには、教員や職員に対する研修もまた重要である。

情報リテラシーと評価

以下の能力においては、5つの基準と22のパフォーマンス指標がある。基準は、すべてのレベルの高等教育における学生のニーズに焦点を当てたものである。また、基準の下には、情報リテラシーに向けた学生の進捗状況を評価するための成果を列挙してある。それらの成果は、教員、図書館員、その他の職員が、その大学に固有の使命を踏まえて学生の学習を測定する際に、独自の方法を開発するためのガイドラインとして役立つ。また、すべての学生の基本的な情報リテラシーの技能を評価することに加え、教員と図書館員は、特定の学問領域において、その学問領域で見られる知識創造、学術活動、出版プロセスに関して特有の理解をする際に、情報リテラシー自体を明確にできるように、評価の手段と戦略を共同で開発していくべきである。

これらの基準を実施するにあたり、大学は、思考技能が異なるレベルでは、それぞれ異なる学習成果を生み出すこと—それゆえ、異なる手段や方法がそれらの成果を評価するために不可欠であることを認識する必要がある。例えば、ブルーム(Bloom)の「教育目標体系表(Taxonomy of Educational Objectives)」に基づく「高次」と「低次」の思考技能は、両者とも、この文書で詳述された成果の隅々に表れている。各々の成果に関連する思考技能に適した評価方法が、その大学の実施計画の不可欠な部分として認識されることを強く推奨する。

例えば、以下の成果は、「高次」と「低次」の思考技能を表わす例としてあげられる：

「低次」の思考技能：

成果 2.2.2. 必要な情報に対するキーワード、同義語、関連語を明らかにする。

「高次」の思考技能：

成果 3.3.2. 可能ならば、追加の情報を必要とする新しい仮説を構築するために、より高いレベルの抽象化ができるように、初期に組み立てたものを拡張する。

教員、図書館員、その他の職員は、協働して評価方法を検討することが、体系的かつ包括的な情報リテラシー・プログラムの計画において非常に生産的な営みであることに気づくだろう。この評価プログラムは、すべての学生に行きわたり、さらなるプログラム開発のための領域を正確に提示し、既に達成された学習目的を統合していくものにするべきである。また、教養ある学生・市民の育成に情報リテラシーがどのように貢献しているかを、大学の構成員に対して明示するべきである。

注

[1] American Library Association. *Presidential Committee on Information Literacy. Final Report.* (Chicago: American Library Association, 1989.) <http://www.ala.org/acrl/acrlpubs/whitepapers/presidential.htm>

[2] National Research Council. Commission on Physical Sciences, Mathematics, and Applications. Committee on Information Technology Literacy, Computer Science and Telecommunications Board. *Being Fluent with Information Technology.* Publication. (Washington, D.C.: National Academy Press, 1999)
<http://www.nap.edu/books/030906399X/html/>

[3] Several key accrediting agencies concerned with information literacy are: The Middle States Commission on Higher Education (MSCHE), the Western Association of Schools and College (WASC), and the Southern Association of Colleges and Schools (SACS).

[4] Boyer Commission on Educating Undergraduates in the Research University. *Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities.* <http://naples.cc.sunysb.edu/Pres/boyer.nsf/>

Standards, Performance Indicators, and Outcomes

「高等教育のための情報リテラシー能力基準：基準、パフォーマンス指標、成果」

基準 1

情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報の性質と範囲を見定める。

パフォーマンス指標：

- 1 情報リテラシーを身につけた学生は、情報に対するニーズを定義し、明確に表現する。

主な成果：

1. 研究のトピック、あるいは他の情報ニーズを確認するために、クラス討論、学生同士の作業グループ、電子的討論において指導者や参加者と協議する。
2. 情報ニーズに基づいて論題を展開し、論点を定式化する。
3. トピックに関する知識を増やすために一般的な情報源を探索する。
4. 扱える程度に焦点を絞るために、情報ニーズを定義する、あるいは修正する。
5. 情報ニーズを記述するキーとなる概念と用語を確認する。
6. 新しい情報を生産するために、現在持っている情報がもともとの考え、実験、分析と結びつけられることを認識する。

- 2 情報リテラシーを身につけた学生は、利用可能な種々の類型や形式の情報源を見分ける。

主な成果：

1. 情報が、どのようにフォーマル、インフォーマルに生産され、組織化され、流通するかを知る。
2. 知識は学問領域のなかに組み込まれており、学問領域によって情報にアクセスする方法が違ってくことを認識する。
3. 利用可能な種々の形式（例えば、マルチメディア、データベース、ウェブサイト、データセット、視聴覚資料、図書）の情報資源について、その価値や相違を見分ける。
4. 利用可能な情報資源の目的や対象を見極める（例えば、一般的か学術的か、最新のものか歴史的なものか）。
5. 一次情報源と二次情報源とを区別し、各学問領域において、その利用や重要性がどのように異なるかを認識する。
6. 情報は、一次情報源からの生データで構成される必要があることを理解する。

- 3 情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報を収集する費用と便益を考慮する。

主な成果：

1. 必要な情報の入手可能性を見きわめ、身近な情報資源以上に情報探索プロセスを拡大するかどうかについて意思決定する（例えば、図書館間の相互貸借、他の場所での情報資

源の利用、画像・ビデオ・テキスト・音声の入手)。

2. 必要な情報を収集し、その内容を理解するために、新しい言語や技能（例えば、外国語や学問領域に基づいたもの）を習得することが可能かどうかを考慮する。
3. 必要な情報を収集するための実際的な全体計画・日程を明確に定める。

4 情報リテラシーを身につけた学生は、情報ニーズの性質と範囲を再評価する。

主な成果：

1. 初期の情報ニーズを再吟味し、問題点を明確にし、修正し、改良する。
2. 情報の決定と選択を行うために使う基準を記述する。

基準 2

情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報に効果的かつ効率的にアクセスする。

パフォーマンス指標：

- 1 情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報にアクセスするために最適な調査方法や情報検索システムを選択する。

主な成果：

1. 適切な調査方法を見極める（例えば、研究室での実験、シミュレーション、フィールドワーク）。
2. 種々の調査方法の便益と適用可能性を検討する。
3. 情報検索システムの範囲、内容、編成を検討する。
4. 調査方法や情報検索システムから必要な情報にアクセスするための効率的かつ効果的アプローチを選択する。

2 情報リテラシーを身につけた学生は、効果的に設計された検索式を構築し、実行する。

主な成果：

1. 調査方法に適した研究計画を作成する。
2. 必要な情報に対するキーワード、同義語、関連語を明らかにする。
3. 学問領域や情報検索の情報源に特有な統制語彙を選択する。
4. 選択した情報検索システムに適したコマンドを用いて検索式を構築する（例えば、検索エンジンの論理演算子・部分一致・近接演算、図書の索引のような内部的組織法）。
5. 異なるユーザーインターフェースと検索エンジンを用いた種々の情報検索システムにおいて、異なるコマンド言語、手順、検索パラメータを用いて、検索式を実行する。
6. 学問領域に適した調査手順を用いた検索を実行する。

3 情報リテラシーを身につけた学生は、オンラインまたはマニュアルによる種々の方法を用いて、情報を検索する。

主な成果：

1. 様々な形式の情報を検索するために種々の検索システムを利用する。
2. 図書館内で情報資源を見つけ出したり、実際に探索を試みる特定の場所を見極めたりするために、種々の分類法や他のシステム（例えば、請求記号システムや索引）を利用する。
3. 必要な情報を検索するために、大学で利用可能な専門のオンラインサービスまたは対人サービスを利用する（例えば、図書館間の相互貸借・ドキュメント・デリバリー、専門的学協会、大学研究室、コミュニティ情報資源、専門家、実践家）。
4. 一次情報を検索するために、実態調査、手紙、インタビュー、その他の調査資料を利用する。

4 情報リテラシーを身につけた学生は、必要に応じて検索式を改良する。

主な成果：

1. 別の情報検索システムや調査方法を利用すべきかどうかを決定するために、検索結果の量、質、適合性を評価する。
2. 検索した情報におけるギャップを見極めて、検索式を修正すべきかどうかを決定する。
3. 必要に応じて修正した戦略を利用して検索を繰り返す。

5 情報リテラシーを身につけた学生は、情報と情報源を抽出し、記録し、管理する。

主な成果：

1. 種々のテクノロジーのなかから、必要な情報を抽出する作業に最適なものを一つ選択する（例えば、ソフトウェアのコピー・ペースト機能、コピー機、スキャナ、視聴覚機器、調査用具）。
2. 情報を組織化するためのシステムを創り出す。
3. 引用された情報源の種類を区別し、多種多様な情報資源を引用するための要素と正確な構文を理解する。
4. 今後の参照のためにすべての適切な引用情報を記録する。
5. 選択され、組織化された情報を管理する種々のテクノロジーを利用する。

基準 3

情報リテラシーを身につけた学生は、情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自らの知識基盤と価値観に組み入れる。

パフォーマンス指標：

- 1 情報リテラシーを身につけた学生は、収集した情報から抽出した主要なアイデアを要約する。

主な成果：

1. 文献を読み、主要なアイデアを選択する。
2. 文献の概念を自らの言葉で再表現し、データを正確に選択する。
3. 後で適切に引用できるように一つ一つの資料を見極める。

2 情報リテラシーを身につけた学生は、情報と情報源の両者を評価するために、初期の基準を明確に記述し、応用する。

主な成果：

1. 信頼性、妥当性、正確性、オーソリティ、適時性、視点・バイアスを評価するために、種々の情報源から情報を吟味、比較する。
2. 裏付けの議論・方法の構造・論理を分析する。
3. 偏見、欺瞞、ごまかしを認識する。
4. 情報が作り出される文化的、物理的、その他の文脈を認識し、情報を解釈するときの文脈のインパクトを理解する。

3 情報リテラシーを身につけた学生は、新しい概念を構築するために主要なアイデアを統合する。

主な成果：

1. 概念間の相互関係を認識し、裏づけとなる証拠とともに、その相互関係を有用だと思われる最初の表現に組み入れる。
2. 可能ならば、追加の情報を必要とする新しい仮説を構築するために、より高いレベルの抽象化ができるように、初期に組み立てたものを拡張する。
3. アイデアと他の現象の相互作用を調べるために、コンピュータなどのテクノロジー（例えば、表計算、データベース、マルチメディア、視聴覚機器）を利用する。

4 情報リテラシーを身につけた学生は、情報の付加価値、矛盾、その他の固有の特徴を見定めるために、それまでの知識と新しい知識を比較する。

主な成果：

1. 情報が研究やその他の情報ニーズを満たすかどうかを見定める。
2. 情報が、他の情報源から利用した情報と矛盾するものか、あるいはそれらを確証するものかどうかを見定めるために、意識的に選択した基準を利用する。
3. 収集した情報に基づいて結論を導き出す。
4. 学問領域に適した技法（例えば、シミュレータ、実験）を用いて理論を検証する。
5. データの出処、情報収集のツールや戦略の限界、結論の合理性を吟味することで、蓋然的な正確性を見極める。
6. 新しい情報を以前の情報や知識と統合する。
7. トピックの根拠となるような情報を選択する。

5 情報リテラシーを身につけた学生は、新しい知識が自らの価値観にインパクトを与えるかどうかを見定め、相違を調和するための方策を講じる。

主な成果：

1. 文献に見出された異なる観点を検討する。
2. 見出された観点を受け入れるか、捨て去るかを見定める。

6 情報リテラシーを身につけた学生は、他の個人、主題領域の専門家、実践家との対話を通して、情報の理解や解釈が妥当かどうかを確認する。

主な成果：

1. 講義や他の討論に参加する。
2. トピックに関する対話を促すための授業用の電子的なコミュニケーション・フォーラムに参加する（例えば、電子メール、掲示板、チャットルーム）。
3. 種々のメカニズムを通して、専門家の意見を求める（例えば、インタビュー、電子メール、メーリングリスト）。

7 情報リテラシーを身につけた学生は、最初の質問を修正すべきかどうかを見定める。

主な成果：

1. もともとの情報ニーズが満足されたかどうか、または追加の情報が必要かどうかを見定める。
2. 検索式を再吟味し、必要に応じて追加の概念を組み入れる。
3. 用いた情報検索の情報源を再吟味し、必要に応じて他の情報源も含めるようにする。

基準 4

情報リテラシーを身につけた学生は、個人として、あるいはグループのメンバーとして、特定の目的を達成するために情報を効果的に利用する。

パフォーマンス指標

1 情報リテラシーを身につけた学生は、新しい情報とそれまでの情報を使って、特定の成果物やパフォーマンスを計画し、創り出す。

主な成果：

1. 成果物やパフォーマンスの目的や形式に適した方法で内容を組織化する（例えば、アウトライン、草稿、ストーリーボード）。
2. それまでの経験から身につけた知識や技能を成果物やパフォーマンスの計画・創出に結びつける。
3. 引用や言替えを含め、新しい情報やそれまでの情報を成果物やパフォーマンスの目的や

形式に適した方法で統合する。

4. 必要に応じて、デジタルテキスト・画像・データを操作し、もともとの場所や形式から新しい文脈に合うように変換する。

2 情報リテラシーを身につけた学生は、成果物やパフォーマンスの創出プロセスを修正する。

主な成果：

1. 情報の探索、評価、伝達のプロセスに関する日誌や活動記録を維持する。
2. 過去の成功や失敗、代替戦略を反映させる。

3 情報リテラシーを身につけた学生は、成果物やパフォーマンスを効果的に他人に伝達する。

主な成果：

1. 成果物やパフォーマンスの目的と、想定される受け手に最も適したコミュニケーション媒体と形式を選択する。
2. 成果物やパフォーマンスを創出する際に幅広い情報テクノロジーのアプリケーションを利用する。
3. 設計や伝達の原理を取り入れる。
4. 明確に、かつ想定される受け手の目的に合うようなスタイルで伝達する。

基準 5

情報リテラシーを身につけた学生は、情報の利用とアクセスを取り巻く多くの経済的、法的、社会的な問題を理解し、倫理と法律に反しないように情報を利用する。

パフォーマンス指標

- 1 情報リテラシーを身につけた学生は、情報と情報テクノロジーを取り巻く多くの倫理的、法的、社会経済的問題を理解する。

主な成果：

1. 印刷環境と電子環境の両者において、プライバシーとセキュリティに関する問題を認識し、議論する。
2. 情報アクセスの無料対有料に関する問題を認識し、議論する。
3. 検閲と表現の自由に関する問題を認識し、議論する。
4. 知的財産権、著作権、著作権のある資料の公正利用に対する理解を実際に示す。

2 情報リテラシーを身につけた学生は、情報資源のアクセスと利用に関する法律、規則、大学の方針、エチケットに従う。

主な成果：

1. 一般的な慣例（例えば「ネチケット」）に従って電子討論に参加する。

2. 情報資源へのアクセスのために、認証パスワードや他の形式の ID を利用する。
3. 情報資源へのアクセスに関する大学の方針に従う。
4. 情報資源、機器、システム、施設の統合性を保持する。
5. テキスト、データ、画像、音声を法律に沿って入手、蓄積、配布する。
6. 何が剽窃となるのかを理解し、他人に属する業績を自らのものとして表現しない。
7. 人間を対象とする研究に関係する大学の方針についての理解を実際に示す。

3 情報リテラシーを身につけた学生は、成果物やパフォーマンスを伝達する際に情報源を利用していることを認める。

主な成果：

1. 情報源を引用するために適切な文書スタイルを選択し、首尾一貫して用いる。
2. 著作権のある資料の利用に際しては、必要に応じて、許諾請求通知を出す。

付録 I 情報リテラシーの主な動向

- ・ 1989年、米国図書館協会(ALA)情報リテラシー委員会が「最終報告書 (*Final Report*)」を出し、情報リテラシーについて次の四つの要素—情報が必要なときそれを認識し、必要な情報を効果的に探し出し、評価し、利用する能力を定義した。
[<http://www.ala.org/acrl/nili/ilit1st.html>]
- ・ 1990年に、ALA委員会「最終報告書」の提案に基づいて、米国情報リテラシーフォーラム(NFIL)が創設された。NFILは、「国内外において情報リテラシーが必要だという認識を広める活動を行い、情報リテラシーの獲得につながる活動を促進するために、75以上の教育、ビジネス、政府組織が集まったものである」。フォーラムのメンバーは、国内外、さらに自らのプログラムのなかで情報リテラシーを促進する。
[<http://www.infolit.org/index.html>]
- ・ 1998年3月に、NFILは「情報リテラシーに関する進捗状況報告書 (*A Progress Report on Information Literacy: An Update on the American Library Association Presidential Committee on Information Literacy: Final Report*)」を出した。
[<http://www.infolit.org/documents/progress.html>]
- ・ 1998年、米国学校図書館協会(AASL)と教育コミュニケーション工学協会(AECT)は、「児童・生徒の学習のための情報リテラシー基準 (*Information Literacy Standards for Student Learning*)」を出版した。AASL/AECTの基準は、初等中等教育の児童・生徒のための能力を詳細に定めている。
- ・ 1989年以降、全国的な基準がなく、多くの州、学校区、州立大学システム、各地域の機関が情報リテラシーの能力に関する基準を開発してきた。 [<http://www.fiu.edu/~library/ili/iliweb.html>]

情報リテラシー能力基準作成にあたった ACRL タスクフォースのメンバー

Patricia Iannuzzi (座長)

Associate University Librarian and Director
University of California at Berkeley
piannuzz@library.berkeley.edu

Mike Eisenberg

Director, School of Library and Information Science
University of Washington
mbe@u.washington.edu

Donald W. Farmer

Vice President for Academic Affairs
Kings College (PA)
dwfarmer@kings.edu

Craig Gibson

Associate University Librarian for Public Services
George Mason University Libraries (VA)
jgibson1@fen1.gmu.edu

Lori A. Goetsch

Director of Libraries for Public Services
University of Maryland
lgoetsch@deans.umd.edu

Althea H. Jenkins, Ex-Officio

Executive Director
Association of College and Research Libraries
ajenkins@ala.org

Barton Lessin

Assistant Dean and Director,
Science and Engineering Library
Wayne State University
b.lessin@wayne.edu

Bonnie Gratch Lindauer

Coordinator of Reference Services,
City College of San Francisco
bgratch@ccsf.cc.ca.us

Hannelore B. Rader

University Librarian
University of Louisville
hbrade01@gwise.louisville.edu

Oswald Ratteray

Assistant Director for Constituent Services and Special Programs
Middle States Commission on Higher Education
oratteray@msache.org